

## 我々の歩んだ道は

### 何だったのだろうか

広島県 増田 敬三

生い立ちから入隊

私は明治四十五年二月、父静一と母ツタヨの長男として生まれた。この年の七月に明治から大正に変わったのだから、最後の明治人ということになる。家は広島県竹原市（当時賀茂郡莊野村）の小自作農で、父は大工をしていた。母は私が四歳のとき死亡して、後添えにカヨが来て、妹と弟ができた。

当時の尋常高等小学校を卒業して、韓国の釜山に働きに出かけた。近所の酒造りの杜氏が西山という醸造元へ連れていった。秋に出掛けて春に帰る。翌年も半年間この酒屋で働いた。釜山から帰ってきて家にいるときは百姓仕事を手伝った。酒造りの仕事にそれほど興味は持てなかったが、それにも増して嫌なのは農業

の方だった。

農業をしたくないために、家出をしてしまう。行く先は北九州の港。そこで石炭船の底に入って石炭を手かごに入れる仕事を始めた。今度は沖仲仕の見習である。ところが、ここで働いている二十人ほどの大人はほとんどが入れ墨をしているではないか。

驚いたり怖くなったりして、働き始めて一月がたったころ、飯場の親方が私を呼んだ。君は親兄弟がおるかど静かな口調で尋ねる。「いる」と答えると、家に帰れと言う。私自身も大変なところに来たなど思っていたので、この言葉を渡りに船と飯場を引き揚げて我が家に戻った。迎えてくれた家族は無言のまま涙するばかり、こつちも黙ったまま泣いていた。

やがて竹原のタクシー会社に働き口を見つけ、これがその後の私の人生の軸になる。助手をしながら十八歳になるのを待つて、車の免許を取る。自分でタクシーをやるとういう目標のようなものが生まれ、徴兵検査が終わると、何とか営業免許をもらうことができた。このとき竹原から七人が申請をして二人にしか許可が

下りなかつたのだから、とにかくうれしかったのを今でも覚えている。そしておじに資金の工面をしてもらい、若造ながら二十一歳でタクシートの開業にこぎつけた。車はシボレーを一台、大阪から中古を買ってきた。従業員はだれもない。ない知恵を絞って「思ひ出タクシー」と名付けた。利用客にいい思い出を持ってもらい、次にタクシーを利用するときはすぐに思い出してもらえようと願つての名前である。その後、昭和九年に松本家の娘四女と結婚、車もふえ従業員もでき、子供も応召までに二男一女に恵まれた。

こうして仕事、家族ともに愉快に進んでいる間に世の中の動きは急で、昭和十二年に日中戦争が始まつてからはガソリンが配給制になった。客はあるのだがガソリンがなくて、二台のうち一台はいつも遊んでいた。暇を持て余していろいろの遊びを覚えたのはこのころである。こうした時節柄、やむなくタクシーからトラック運送に営業を切りかえる。二台の車の一台は木炭車で、主に材木の運送に当たった。さらに昭和十五年と記憶しているが、竹原地区のトラック業者に車

を持ち寄つて一つの会社をつくるようお上の命令が出され、十台のトラックを保有する竹原貨物自動車会社が生まれた。

そこで働き出してほぼ一年が過ぎた昭和十六年の七月、関東軍特別大演習の名で召集令状がきた。赤紙は本籍地にいる父のところへ届けられたが、それを持つて父は夜中に私の家に来て、わざわざ外に呼び出した上で、だれにも言つてはならない、内緒で行くと、くどいほど念を押して私に令状を渡した。戦争の準備がこのようにして秘密のうちに行われていたのであろう。私はだれの見送りの受けることなく、平服のまま一人汽車に乗つて、広島西部十部隊に入隊した。

そこで一つ星の古びた軍服とゴボウ剣を支給されたが、兵舎には案内されずに広島市空鞘町の石炭商の家に連れて行かれた。この家で私と同じ数人の新兵が五日ほどお世話になったが、その後、広島が原爆で焼け野原になり、石炭商を探す手がかりは今では全くない。入隊から五日たつて宇品へ向かえとの命令。見送りに来た親兄弟、家族と後になり先になりして港まで歩

いた。到着してからは肉親は余り近寄らず、遠くから別れを惜しんでいる。そんなとき、「お父ちゃんサヨナラ」と子供の声が一声大きく響き、三人の子供を残していく私にもジーンと込み上げてくるものがあつた。

ハイラルからシベリアへ

朝鮮に上陸して釜山の民家に宿泊した後、再び出発。私どもは全然行く先は知らない。隊の中には満州事変、日中戦争のベテランも混成なので、貨物列車にアンペラ敷きの列車が時たま停車した折は、チャンチューなどを手に入れて、おもしろおかしくやっていた。のんびりした貨物からの風景は、右を見ても左を見ても山一つない大草原。約一週間もかかっていよいよ着いたところがハイラルだった。バラックの兵舎、干し草の上にアンペラを敷いたねぐら、称して第十九野戦自動車廠、またの名を満州第二六四一部隊、私どもが行つて産声を上げた部隊である。

ハイラルの大ざっぱな輪郭に触れてみると、木のあふる山は全くない。大草原といつても見渡す限りの草原ではなく、大きなうねりの高低がある。それに川幅七、

八十メートルのハイラル川。町の人口は、大体日本人（民間人）が二百人もいたのか、主に料理屋とか土建会社、商社……皆何らかの形で軍との関わりを持つ者だった。中国人は想像だが二千人もいたろうか。北に寄つた、しかも国境に近い町で——かつて昭和十四年五月から九月にかけて、郷土の先輩である七十連隊（福山、山口、浜田）の戦友がソ連に痛めつけられ、半数近い七千四百余人が戦死あるいは負傷した当時の兵屯基地——当時は町も小さく、兵力も少なかった。私どもは関特演（関東軍特殊演習）を行つてから大体二十個部隊になり、大きく変貌していった。

さて初めに驚いたことは、大変に水が冷たい。冷たいというばかりでは想像がつかないので一例を挙げると、靴下一足洗うのに、途中で手を休めないと言指がしびれて絞ることができないくらいだ。私どもが着いたのが八月で、日の当たるところは非常に暑い、いったん日陰に入ると途端に寒くなる。不快指数はゼロ。本当に大陸性の気候だ。

兵舎に落ちついて最初の入浴のときのこと。私は補

充兵で軍隊経験なしの一つ星、右を見ても左を見ても知った者はもちろんいない。湯から出て服を着て、靴を履こうと思うと自分の靴がない。だれに相談もできず、泣くにも泣けない。ところがよくしたもので、入浴中の兵がいるので、私のがなくてもほかの靴はある。「窮すれば通ず」、昔の人はうまいことを言ったもんだ。あたりを見回して素早く上等そうな靴を履いて、一目散に自分のねぐらに帰った。我ながらそのときの機転に感動した。その次の兵も、またその次の兵も、私のとおりやったことと思う。最後の者もまたどこかで何とかしたことだろう。

各兵に支給する軍服、夜具などがこれまた傑作だ。平素着る服は十年も前から何人も何人も着古したもので、長かろうが短かろうがお構いなしである。営内靴

(昔のお医者がよく履いたような、兵営内で履く靴)

は、足が二つ入ってもガボガボするようなものである。班長の言うことには「オーイ、みんな服や靴を体に合わすんじゃない、体を服に合わすんだ」、全く驚きの連続だ。

いよいよ日常の生活が始まり、最初の冬が訪れた。毎朝の行事だが、便所に入って何気なく下を見ると、何か下からのぞいている。薄暗いのでよく見えない。後で知ったことだが、大便をする位置がだれも同じなので、毎日積み上げていくにつれて大便の柱ができ(落ちてすぐ凍る)、それが下からのぞいていたわけだ。また小便も昔の駅の便所、つまり十人くらいが砲列を敷くようなつくりで、これもすぐに凍る。

通常、便所はひしゃくと桶で取るように考えるが、これまた北でなくてはまねのできない風景である。週番上等兵が使役(雑用兵)を集めて指揮し、小便氷は鉄棒で砕いてくま手と手でとって大八車に積む。そして桶ならぬ柳で組んだかごに入れる。片や大便柱は、踏み板と便所の間に鉄棒を入れてイチニイサンと気合いもろともテコにして転がす。それがだんだんたまる

と、満人(指定人夫)が来て、日本でいうくみ取り口に入ってガンツメなどがかごに取ってどこへともなく運び去る。

寒さについて日常のことを書けば数限りないが、例

えば、バケツをつかめば手にピタツとくつつく。慌てて放そうとすると手の皮がはげる。また入浴の折タオルを持って帰る道中、二分くらいですっかりタオルの柱ができる。

話は前後するが、記憶をたどると、小田曹長（現ハイルル会長）はだんだんひげが伸びていって、仁丹の広告のカイゼルひげにそっくりで、通称仁丹。部隊長の顔は知らんが、仁丹といえは部隊中に行き渡っていた。顔には似合わず非常に温和で、上下の信頼が厚かった人だ。私は当初は、へ隊に所属しており、隊長は石井中尉（横浜）、ほかに室谷少尉（山口）、沼田曹長（呉阿賀）、小谷伍長（広島市）、保村軍曹（防府市）らだった。

十八年七月には若い補充兵が来て、さらに十月には大分しなびた補充兵がやって来た。平塩五男（佐伯郡）、宮田一雄（広島市猫屋町）、元山（広島市高陽町）、永谷一郎（廿日市市）らである。その後中隊も大きく編成替えされ、私も吉永中尉、井上少尉、中島少尉、東条軍曹、土居軍曹（豊田郡安芸津町）の下で心機一転、

ちょっとは気合いを入れなんと、昼食前に補充兵に向かって「一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべしを覚えてか」とやるのが私のほかの一つ覚えになった。

このころと前後して、中隊は東山からシートン元戦車隊の赤れんがの兵舎に移り、さらに満州里に移動する。満州里はソ連とはすぐ隣である。国境はどんなふうになっているか興味もあって、地元の戦友に案内してもらって小高い丘に行ってみると、四キロ間隔くらいに小石で盛り上げた小山がつくつてある。その小石の量が大体四トントラック二十台分か。さくでもあるのかと思ったというと、戦友いわく「さくは簡単に取り除けるが小石は早く運べないので……」と答える。本当かうそか、まことしやかな説明である。

ソ連軍の兵舎が見える。兵もたくさんいて、厩舎の手入れを盛んにやっていた。そのとき思わず戦争になれば、とゾツとした。

何せ北の国境なので、町といっても人口は少なく、ノロ（ヤギに似ている動物）がとてもたくさんいて、三八歩兵銃三丁とトラック一台、人数は五名で一日十

九頭のノロとオオカミ一頭をとったこともあった。ノロの肉はまずくて、オオカミは食うと背中がかゆくなつた。

私どもは修理班なので残業することがたびたびで、

夜遅くなつて入浴に行つていた。ある夜、将校専用の浴槽で、たまたま私一人がいい湯だなと湯につかっていたら、若い兵隊が二人連れで入つてきた。浴槽の私を見て二人は不動の姿勢で礼をする。私も夜間とはいえ将校専用に入っているので多少の動揺はあり、「オ―」と答えはしたものの内心穏やかではない。二人の兵は隅の方で私に遠慮していることがうかがえる。早々に湯を済ませて脱衣場に出てみると、少尉の服が脱いであったのは驚いた。私の方は作業着を脱いでいたのだが、当時はひげを大きく伸ばしていたので、二人の少尉は私を上級の将校と間違えたのかもしれない。服を着るのもそこに引き揚げた次第だ。

四、五カ月の満州里からまたシートンに帰つての日常が始まつた。その間にも、大東亜戦争は南を舞台に大きく繰り広げられていた。どこを占領、何々の戦果

の報。その度ごとに「しつかりやつてくれえよう」と勝手に祝杯を上げていたものだ。だが、そのうちにサイパンやトラックその他各所で日本軍の玉砕が伝えられるようになり、ハイラルの主力戦闘部隊である七三七の精銳も全部南下していった。この部隊は途中で撃破されたと聞いている。ハイラルも燃料や食糧の節約に努める。馬鈴薯でアルコール（自動車用）も作つた。書いていけば際限がないので、昭和二十年八月八日のソ連の空襲に移る。

#### ソ連軍侵攻——八月八日

二六四一部隊は数カ月前から各中隊が四平街、チチハルを初め各方面に逐次移動していたので、各中隊で八十名ほどが最後尾で列車の来る日を待つて、おのおの本隊に集結する段取りだった。荷物も既に送つて余り作業もなく、待機姿勢で案外のものびりしていた。

八月八日の朝、点呼前だった。八時ころ、飛行機の爆音が聞こえてくるではないか。もう二年も前から飛行機の飛ぶのを見ていなかったの（ハイラルの飛行機は全部南方に行つていた）珍しく思い、舎外に出て

みると二、三千機が飛んでいる。そのうちシートンの方に大きな土煙が上がり始めた。私たちはそのとき東山に帰っていた。よく見ると、ソ連軍の爆撃だ。驚いて「だれかラジオのスイッチを入れてみい」と、スイッチを入れると同時に興奮したアナウンサーの声。震える声で「全満の皆さん、ソ連と戦闘状態に入りました」と叫んでいる。そのとき初めて戦闘開始を知る。

さあ大変だ、いよいよ来るときが来たのである。ところが、ハイラル司令部に命令受領に行ったはずだが、その命令が一向に要領を得ない。これは後から聞いた話だが、司令部に行ってみると偉い人はおらず、どこかへ飛び立った後だったとか。その真偽のほどはともかく、将校も兵隊も突然の空襲で大変な動揺があったことは事実で、今思い出しても恥ずかしい。早速部隊近くの空き地に分散し、各個援体（一人入る壕）などを利用しながら、息つく暇なしの敵襲を恨めしく見ているだけだ。

夕方からますます空襲は激しさの度を加え、ハイラル市街は火の海となった。前後して弾薬補給廠に火を

つけたのか、大音響とともに、四時間にわたって砲弾が飛んでくる。いよいよ暗くなってきたが、照明弾投下で昼をもしのぐ明るさだ。交戦するにもこちらは小銃と腰につけたゴボウ剣、相手は飛行機だ。命令はあいまいで、ただ抵抗はするなどれ言うとなく伝わってきた。二十四時ころだったろう、ヘッドライトを明々と照らして私たちの東山部隊に近づいて来る。歩哨が明かりを消せと叫んでも、それは悠々と構わずに進んで来る。私もやみをじいっと透かして見れば、長い砲を搭載した、当時ソ連が世界に誇る重戦車ではないか。それが営内に向かってバンバンではなくドーンドーンと戦車砲を撃ち込んで悠々と去って行った。このさまを見た小隊長井上少尉は、今切り込もうか今切り込もうかと決断に迷った、と後日話してくれた。

ソ連軍の来襲によって、隊長の決断命令、十三名が「皆一体となって南下する」ことになる。夜間の爆撃の中で整然？と準備完了。トラック二台、隊長車一台で南に向かって出発した。トラック二台はたしかトヨタで、平素使っている一九三四、五年の車。タイヤも

悪い。それに食糧や衣類を積めるだけ積み込んだので、一時間も走っているうちにタイヤはヘたるし、思うように走らない。私たち二六四一部隊は北滿全域の自動車補給廠だ。にもかかわらず何百台もの新車を全部残してポロ車での移動である。走っていても敵の戦車がすぐ後から追ってくるような衝動に駆られて仕方がない。

車がパンクで走れないので、積んでいたものを、まず、しようゆ、みそなど重量の重いものから順々に捨てながら前へ進む。とうとうトラック一台がだめになり、かわりを調達しようということになった。折よく向こうから来た在滿白系ロシア人の車（ソ連製ジーブ）をとめ、着剣して取りかえる。その車も前の車と似たりよったりだ。でもどうにか走るの走る。八月九日の昼間だ。どこまで行っても空襲は続き、障害物一つない草原に連なる自動車の長蛇の列（北滿からの全部隊が一本の街道にひしめいていた）を目がけて、低空射撃である。その度に私は車をとめ、鉄かぶとをかぶり低地を求めて伏せる。だが、井上少尉だけは頭

の上まで迫る機銃掃射をもともせず、軍刀片手に敵機をにらんでいた。

食糧は途中でほとんど捨てたし、飯をたくことも考えがつかない。手つとり早く道端のキュウリをとり（八月なので部落の近くにある）、それに砂糖と水で二日ばかりをしのいだ。興安嶺の近くまで来たときに、十メートルくらいの間隔で掘られた道路の各個援体の中に一つ星の童顔の残るあどけない兵隊を見た。マントウ（砂糖がジェット機で飛んだようなあん入りの蒸しまんじゅう）を二つと戦車爆弾を抱いて、敵の戦車の下に自分の体もろとも突っ込むべく目をりんと輝かせて待っているではないか。車を走らせながら思わず胸が込み上げた。

休まない空襲をくぐり抜け、ようやくプハト駅近くで大休止。プハトは友軍の部隊もいるので、糧秣をもらって飯ごう炊さんにかかり、駅近くの林でやれやれおいしいのうと言って腹いっぱい食べる。

ところが、たばこに火をつけた途端に四機ほどの敵機が低空で爆弾投下してきた。瞬間的に私は五メートル



ルほど移動して伏せた。と同時に鉄帽がぶっ飛んだ。やられたあとだったが、どこにも異常はない。敵機が去って見れば、隣で飯ごうを洗っていた戦友（名も知らぬ）が肩と頭を飛ばされて胴体だけが残っている。その爆撃現場で、血みどろの負傷兵をキビキビした動作で鉄道病院に運んだ看護婦さんの活躍は、神様のようであった。

## 終 戦

その晩は山の近くを選んで設置されている仮兵舎に入った。そのころから飛行機の音も聞かなくなり、だれ言うもなく戦争はもうないとか終わったとか、日本は降伏したとか、いろいろな情報が乱れ飛んだ。ついに武装解除の命令が伝達されたが、皆半信半疑で、手りゅう弾一個は各自胸のポケットに隠し持ったし、また三八式（歩兵銃）も車に忍ばせた。明けて十四日、昨日までと打って変わって敵機の姿は全くない。八日朝の開戦以来、初めて解放された安堵感と不安感がまるで電気のように胸の中で交錯する。

車の擬装も全部取り除いて一路南下を開始し、道中

平穩のうちに夕方ジャラントンに着く。部落の家々は日の丸ならぬにわかづくりの赤旗が全戸に立ち並んでいる。かいま見る中国人に私ども日本軍をさげすんでいる様子がありありとうかがえる。驚き、かつ悔しかった。でも、もう敵は来ない。安心しての大休止で、皆思い思いに子豚や鶏をつかまえてきて、水のほとりでゆっくり飯ごう炊さんして腹いっぱい食べた。そして一週間もすれば内地に帰れるだろうと勝手なことを戦友同士で話していた。

ちょうどそのころ、私たちが来た街道からガラガラと戦車のキャタピラの音がしてきた。見れば戦車の上でマンドリンを弾き、大声で歌いながらソ連の戦車隊だ。彼らも独ソ戦で食うか食われるかの激戦で日焼けした実にたくましい兵士だが、見るからに屈託のない朗らかな印象は、今も忘れられない。そのときソ連の隊長が初めて 日本軍に言った言葉（女の通訳を通じて）は、私が恍惚の世界に入ってもなお忘れることはできないだろう。「殺しやしません。逃げちゃいけません」。

昭和二十年八月十四日夕方、かくて部隊全部が包囲され、トラックはこちら、乗用車はこちらと、ソ連軍の命のままに整然と取り上げられた。忘れ物があつても、もう車には近づけない。やれやれ、二六四一部隊（途中の戦死した戦友は別として）八十名近くは、こうして完全に足（自動車）を奪われた。今後どうするか、どうなるか、将校も兵も成り行きに任せるほかない。

食事をした場所に集まつて、八日以来の疲れと不安と安堵のうちに野宿をすることとなった。適当にねぐらをつくつて次々とグウグウ寝てしまった。でも河井伍長、永井伍長と私は出かけていた井上少尉の帰るのを待った。

自決！

実に沈痛な面持ちで帰つてきた井上少尉は、私たち三名を離れたところに呼んで、「今、部隊全員自決しよう」と将校で話し合つたがまともならなかつた。この上はせめて吉永隊十三名だけでも自決しよう」と言う。そのとき私の心中は、停戦にせよ降伏にせよ、戦争が

終わった瞬間から、三人の子供や妻、親弟妹、故郷のことでいっばいだつた。でも、そのことは口には出せない。戦陣訓どおりにいけば「生きて虜囚の辱めを受けず」で、二六四一部隊全員自決で「御名御霊」ということになる。だが、井上少尉を除く全員が死にたくなかつたのが偽りのない気持ちであつた。

話は「吉永隊だけでも」に戻るが、四名でときれとぎれに話しているうちに、雨がぼつぼつ落ちてくる。

ソ連の歩哨がマンドリン（自動小銃）を持って私どもの近くを動哨している。そのとき初めて完全に包囲されていることを知る。話し合つていっても自決をしようという話なので、ややもすると長い沈黙が続く。じつと顔を突き合わせた時間が四時間くらいだつたらうか、暗やみの中で時計の針も見えないが午前二時ごろか。話の内容は余りにも長くてせつないので省くが、最後の話だけはぜひ皆さんに聞いてもらいたい。

私は、「隊長殿、自分たちも戦陣訓一筋に、過ぐる四年間、今まで喜怒哀楽を秘めて奉公してきました。

しかし自分たちが降伏したわけではありません。日本本土からの命令です。今すぐ自決することは思いとどめて、いまし状況を見てからでも遅くないし、戦友皆いつでも自決できるよう手りゆう弾は各自胸のポケットに隠し持っています」と。

すると非常に低い声で物静かに井上少尉は、「とりもなおさず捕虜ではないか。これから先、内地に帰っても決して幸せはない。まあ皆疲れているんで寝よう」と答えた。これが井上少尉の最後の言葉になろうとは。

戦友が四人の床を敷いてくれており、四人並んで八日以来の疲れもあつてぐっすり寝入った。大陸の夏は夜が非常に短く、二時間もまどろんだらうか。隣の永井伍長が私を揺り動かすので瞬間的に井上少尉の床を見ると、寝ているはずの隊長がいない。河井伍長も共に三人で顔を見合わせる。何とも筆や言葉であらわせない複雑な気持ちがよぎった。既に空は白んでいる。歩哨は間断なく動哨している。

三人で、ほかのだれにも告げず、手分けしてものの

五分も探しただらうか。忠霊塔の前で三八の歩兵銃を抱き、右の長靴を脱いで、銃口をのどに当てて右足の親指で引き金を引いて自決している井上少尉を発見した。三人は無言のまましばし茫然。気をとり直して、口はつぐんだままで手まねで私は見張り、河井、永井は髪を切り、爪も切ろうとしていると、歩哨が近づいて来たので、急いで引き返して機をうかがう。だが、そのうちすつかり夜も明けて歩哨の監視もますます厳重になり、全く動けなくなつた。

やむを得ず中島少尉のみに報告して、ほかへは秘めたまま井上少尉の持ち物（荷物は皆本隊に送つたので、当座に必要な板でつくった小さなトランクだけだった）をあけてみると、一番上に便せん一枚目を書きかけて次の紙に辞世の句が書いてあり、さらに見ると、下着、靴下、ふんどしが全部洗濯して濡れたまま整然としまつてあるではないか。今にして思えば、八日のソ連軍空襲のとき既に「生きて虜囚の辱めを受けず」として死を覚悟していたのであらう。これぞ真の武士であつたのかと、尊敬の念でいまだに表現の言

葉がない。

その日（十五日）のうちに部隊全員狭い一カ所に集められて、一步も外へ出ることはできなくなつた。そのとき改めて自決前物静かに「とりもなおさず捕虜ではないか」と言つた井上少尉の言葉が胸を突いた。思えば、十四日の朝武装放棄してからここに集められるまでは不安もあつたが、反面安堵もあつた。しかし今は不安が募るばかりで、ある戦友は銃殺されるとブルブル震えている。また部隊の中では井上少尉がいないので、彼は逃亡したんじゃないかなど、うわさにうわさを呼んだ。

ここで井上少尉の人柄を簡単に紹介させてもらいたい。東山の部隊にいたときのことだ。部隊長室に入るときはほとんどの将校、下士官が室外の当番兵に親指を出して部隊長は在室かのジェスチャーをしたものだが、彼だけは全然そのしぐさをしなかつた。小柄ではあつたが堂々と入室していた。また私が作業中トラックの上で昼寝をしていたときも、見て見ぬふりをしていた。営内で欠礼しても、週番勤務以外のときはほと

んど部下をとがめたことがない。そのことがよいか悪いかは別として、とにかく物事に動じない太っ腹な人であつた。小隊長と部下という間柄で二年近く続いて、最後には彼一人を自決させたことは、私、河井伍長、永井伍長それぞれ、悔いても悔いてもぬぐい去ることはできない。

なお、私のときれとぎれの記憶をたどれば、火野葦平の書いた、北九州を舞台に物語を繰り広げる『花と龍』に出てくる井上安五郎氏は、井上少尉の厳父であり、かつて若松市長であつた。

#### 終戦後の軍のその後

ジャラントンに二週間くらいいて、もと来た道を、今度は捕虜の身で、しかも夢も希望もない不安のまま、三泊四日の徒歩行軍で引き返した。ソ連軍の歩哨が隊列の最後尾で自動小銃を肩にかけてダバイダバイ（早く早く）、おくれたら撃つぞとせつづく。八日の開戦以来本隊と別れたり敵襲を避けあるいは道に迷つて精根尽きた戦友のしかばねを横目で見ながら、ようやくハト地区の収容所に連行される。着いてみれば、いる

こといること、一万五千名くらいだったか。

### シベリア抑留地への旅

ブハトの約二カ月、飢えはその極に達した。歩哨の監視も何のその、有刺鉄線の柵をほふく前進でくぐって近くの畑にカンランを盗みにいく。高いやぐら上の歩哨に見られたら自動小銃でバンバン、何とあつけない死が待っていることだろう。私が目撃しただけでも五、六名は銃殺された。八月八日以来水浴一つしていないので、着ている衣類は一枚残らずシラミに占領され、飢えとシラミに悩まされながらどうすることもできない。いよいよ汽車に乘せられた。

日本に帰すんだ、否、ソ連に連行だ、戦友の思い思いの喜びと不安の交錯するまま、貨車(全然窓のない)は北へ北へ。北満からシベリア鉄道へは一本で、カリムスカヤ(ソ連)がナホトカ及びウラジオストツク、日本海に出る分岐点になっている。シベリア鉄道まで北上しながらカリムスカヤから日本海に出て日本に帰すんだ、どうだと勝手な想像をして一縷の望みを持ったが、着いたところはチタ地区のフーシシガのラーゲ

ル(捕虜收容所)だった。中島少尉以下将校、兵計五百名が昭和二十年十月末この地に連行された当時は、来る日も来る日もわずかな食糧で飢えと寒さの戦いが続いた。

中島少尉(山口商高出身、山口県)がしみじみと、「増田、こうなると本当の人間の真価がわかるのう」と話したことがある。人間飢えたときは自分のもの、他人のものという境界はない。例えば黒パンの切れ端を自分の袋に入れて隠しておく。それをだれかが食ってなくなる。でもとがめることをしない。弱肉強食で動物の自然界と何ら変わりがないのである。

五百人でフーシシガに落ちついたが、その冬に二百七十余人の戦友が亡くなった。私は半数以上の友が死んだことをいとも簡単に書いたが、悲惨というか、表現のしようがないのである。いつの日か故郷に帰る日を楽しみに苦難に耐えてきて、ついに寂しく次々と死んでいった戦友の最期を聞いてほしい。

### 戦友が次々と死んでいく……抑留地の実態

前にもシラミのことを書いたが、全員がシラミをど

つさり持参したので、五百人が残らず發疹チブスにかかった。辛うじて半病人の炊事要員のほかは皆四十度以上の高熱を出し、ほとんどが脳症で、うわ言を言っているかと思つたら、コトツと動かなくなつてもう死んでいる。私も例外ではなく、河井伍長と枕を並べて熱にうなされていた。松井衛生兵が皆の熱を次々はかつて、一番高い者から注射してくれる（注射液が少なため）。私が四一度、河井が四〇度五分で五分ほど高い私に先に注射してくれた。今でも覚えているが、うつらうつらの意識の中で木の皮をはぐように熱がとれていったそのとき、河井伍長が泣きそうな声で「増田兵長はエエノー」と言ったことが忘れられない。

それから二日後に河井も脳症を起こして「増田兵長、妹が営門まで迎えに来とるけん、連れてつてくれえやあ」と繰り返しながらとうとう死んでしまった。また永井伍長もその二日後に、わけのわからぬことを大声で叫びながら河井伍長の後を追つた。私もそのときは、大分熱も下がつてどうにか正常の意識に戻つていたので、ジャラントンで井上少尉の言つた「これから先、

内地に帰つても決して幸せはない」との言葉を思い出し、内地どころか極寒のシベリアで捕らわれのまま死んでいった河井、永井をどうしてあの時自決させなかつたか、しなかつたかと悔やまれてならなかつた。

次々に死んでいく友。ソ連は火葬ではなく全部土葬で、そのため死者の穴を掘るのが大変だつた。土地がカチカチに凍っている。初めのころはひつぎに入れて埋めていたが、余りにもどんどん死ぬので穴掘りが間に合わない。その穴掘りも、半病人で自分が歩くのがやつとのありさまなので、やむを得ず浅い穴へ肩の上に肩を重ね七名から十名を一緒に埋めていく。それでも間に合わず、今度は物置小屋に死体を積み重ねて置く。でも気温は零下三〇、四〇度なので、物置に運ぶとすぐにキーンとカチカチになる。そのしかばねを半病人が二、三十名で来る日も来る日も埋葬するのである。

初めのころはひつぎに入れて深く埋めて墓標も立てたが、間に合わぬようになってからは、裸のまま並べてむしろをかけ、その上に掘つた土を盛り上げるだ

けで、墓標も立てなかつた。今考えてみると、戦友でありながら随分冷たいことをしたように思うけれど、そのときはまるで感慨のかけらもなかつた。

歩哨の監視のすきをくぐつてこつそり地方人の家に行き食物をねだつたりして、見つかるゝと死体を積み重ねてある小屋に入れられる。罰である。ただ黙然と凍りついた友のしかばねの上で一晩じゅう罰を受ける。

話が前後になるが、次々に死んでいく死体を山下軍医（目下東京で内科医院開業―戦友藤江恒郎の話）がかみそり一丁できれいに解剖する。これといった病原もなく、ほとんどが栄養不足だつたという。

昭和二十一年の春から

昭和二十年の悪夢の年もようやく明け、シベリアの捕虜の身にも自然の春が訪れた。生き残つた友もどうにか健康を回復し、森林の伐採作業は「ダバイダバイ（早く・早く）ブイストラ（やれ）」でノルマ（仕事の規定量）の明け暮れ。フーシシガは人口五百人余りの村で、鉄道の枕木をつくるのが仕事だ。私たちも地方人も一緒に作業をする。もちろん女性も作業に加わ

る。そのうち顔見知りもできた。

ある夏の日、昼食後の休憩の際、私がちよつと横になつて寝て起きると、とあるマダム（通常女の総称）が「チビヤーマーリンキイエース（おまえ子供がいるか）」と聞く。私「イエース」。すると彼女は「ソオースマトリエース」と来た。「ソオーン」がわからない。私とマダムの間で手まね足まね、さては体全体を使つてのジェスチャーの末、やつと通じた。その言葉はこうだつた。「おまえ子供がいるか。寝ている間に故郷の子供の夢を見たか」。私が見たと言つと、「ハラシヨ―ハラシヨ―オーチンハラシヨ―（よかつたよかつた、大変よかつた）」の連発である。いかに国境を隔てた異国のシベリアでも人の情に変わりはないと、このやりとりの後で一層日本が恋しくなつたものだ。

また、これは自動車修理工場で働いたときのことだが、蒙古系の毛の黒いカマンジール（責任者）が「チビヤ―ウオツカクスクスイエース（おまえ酒を飲んだことがあるか）」と尋ねた。賃金をくれないので酒どころか飯もろくに食えないと言つと、ついで来いと言つ。

そして粗末なレストランに引つ張つていって、コップ一杯サービスしてくれた。ハイラル時代ウオッカで足をとられたりの失敗も経験しているので、チビチビ飲んでいたら、店にいた数人の者が珍しがって大声で笑いながら私の隣に寄ってくる。なぜチビチビ飲むのかと、それが実に珍しいらしいのだ。私の方がかえって面食らった。

私もどうしてウオッカ（当時は彼らにとつても貴重品だった）を飲ませてくれるのかとカマンジュールに尋ねると、彼いわく「私のおじいさんはヤボンスキー（日本人）だ」と。それでおまえが好きだと言うのである。私の想像と分析によると、彼が大正初期に日本軍のシベリア出兵を記憶していたところから、そのときに先輩がさりげなく演じた一幕が私へのウオッカ一杯になつたもののように、胸の中で一人苦笑した。

#### 昭和二十二年の生活

希望のない年が明けて翌二十二年の夏、コルホーズ（農場）へ行くというので、期待を持って五十名ほどが一日がかりでたどり着いてみれば、農場どころか人

家一つない草原ではないか。臨時の天幕で草刈り作業が始まった。冬の牛馬の干し草づくりである。人里離れたところで、私たちの糧秣は三日ごとに自動車で運ばれていたが、何かの間違いから一日ほどその到着がおくれた。毎日食つていても栄養は十分ではないのに、そのためかどうか、日暮れに五十人中二十人ばかりが目が見えないと訴えた。鳥目になつたのである。便所が遠いので行く先がわからず、幕舎から綱を引いてそれを伝つて用足しをする始末になつた。そのうちに松井衛生兵が「鳥目の者は集まれ」と一列縦隊に並ばせて、次々にアーンと口をあけた中に肝油を一滴ずつ落としてくれた。何と驚くことにこれが効いた。翌晚には全員鳥目がすっかり治つていた。

ラーゲルによつてまちまちと思うが、私のフーシシシンは、ノルマ以上の作業成績なら大盛り、中盛りと、飯の量が違つていた。若い連中は大盛りが食べたいので無理をして頑張る。山根訓練生（満州の義勇軍、私たちは訓練生と呼んでいた）は小柄な体でハラシヨラポーター（よく働く人）であつた。平素頑張つてい



だが、余りにやせるので十日間ほど休養室に入ったところ、驚くなかれ十日間で四貫目の体重がふえた。この一件を見てもいかに少ない食糧で体力を消耗していたかわかる。

作業が重労働なので切り傷や骨折は時々あるが、内蔵疾患は全くなかった。昔から「腹八分に医者要らず」ということわざがあるが、腹八分どころか、朝食を食べ終わった腹加減がちょうど昼飯前の腹の状態なのである。このことが恐らくすべての病気を克服していたと思われる。

ここでシベリアにおける三年間の食事を書いてみると、主食の中心は黒パンだが、関東軍が貯蔵していたたくさんのお米を運んできており、時として大豆ばかり（主食として）で二カ月を過ごしたこともある。油を抜いたニシン粕、カズノコもよく食った。朝も昼も晩もカズノコのスープ（全然味が出ぬ）。日本では昨今カズノコは貴重品呼ばわりされているが、そのカズノコスープが二カ月近くにも及んだ。皮肉なこともあるものだ。粟飯が一番よかったが、これは一年間くらい

食った。

でも、あるとき、皮かぶり（小鳥のえさ）のアワ飯を食わされてみんな便が出なくなった。さあ大変、全員がふん詰まりで、だれかが力いっぱい全身の力で奮発してようやく少し出た便を見れば、全く消化していない。いかに私たちが粗食に耐えてきたとはいえ、その便を見たソ連の糧秣係はかぶとを脱いで、一日だけで引き取って別のものと取り換えた。

戦友に相撲（幕下）出身がいて、日本の軍隊では体重八十キロ以上の者は二人食だったと思うが、だれよりもずば抜けて大男の彼は一握りの黒パンくらいではとても足りない。山の作業のときは松の甘はだ（木の皮の一番中のやわらかい繊維）を飯ごう二杯、岩塩を入れてたいて食っていた。

北満でもそうであるが、シベリアは春夏秋冬が同時にやって来る。ニラとキノコが同時に出てきて、一握りのニラを求めて目の色を変えて探し回ったものだ。キノコは四十種類くらいに及んだが、毒ダケであろうと何であろうと片っ端から探して食った。日本のネズミ

タケと同じものがあつた。

私とほかに六人で「コルホーズ(畑) ナーダー(やれ)」との命令を受け、約二町歩ほどの畑でカンラン、馬鈴薯、ニンジンづくりをラーゲルから通いでやったことがある。杉浦(愛知県)が農村出身で、ガブノー(し尿)を肥料に利用しようと言出し、し尿をエツチラオツチラ運んで植物にかけていたら、オフチエル(将校)が大変なけんまくで「増田、グリヤーズヌイ(汚い)」の連発。怒ること怒ること、ソルダート(兵)に食わせるのでよいかと。私も小一時間かかつて説明して、ようやく納得させた。

さて、二名で畑に泊まって番をする。幸いに監視もないので、日がとつぷり暮れるまで食べられそうな草を探し回る。アカザ(日本にもたくさんある)を見てついで次の朝までにゆでてダンゴにしておくと、戦友が作業に来てそのダンゴを一人が九つも食べた。また馬鈴薯は花が出たらもう親指くらいの芋ができていますので、花の出たのから次々に掘ってくる。それを缶詰の空き缶でつくったワサビおろしで当番二人が一晩じ

ゆうかかってでん粉のダンゴにする。翌日皆で食べるのだ。

ここでフーシングの輪郭を書いてみる。人口五百人くらいの村に役場らしいものはないが、村長らしき者はいる。これは労働はしない。村の人口によってノルマ(責任作業)があり、作業成績によってカマンゲール(村長)の顔もよくなる。もちろんハラシヨアラポーター(仕事をよくする人)は賃金が多い。技術者(運転手、修理工、ボイラーマン、先生ら)は一般労働者と比べて賃金ベースが高い。だれでも技術者を望むが、おのずから能力に応じて分かれている。捕虜の身では観察範囲にも限りがあるが、事務員らしい職業の人はほとんど見当たらない。主食供給の黒パン(大麦の皮をとった粉が原料)工場も五、六人でやっている。

幼児は全部託児所に行く(女も働くので)。あるとき託児所が大変静かだった。尋ねると、保母さんいわく「今マーリンキ(子供)ムノーガ(たくさん)スパーチナーダー(寝ている)」。昼寝の時間だから静かなはずだ。毎日の習慣だから子供は皆ちゃんと寝る。小

学校の子供に教科書を見せてもらったことがある。中に豊臣秀吉の絵があるのでどういふことかと尋ねると、即座に「ヤポンスキー（日本人）サムライ、腹切り」と日本語で答えてくれた。

地方人の日常に触れてみたい。食事は一食黒パン一切れ、スープ（カルト―シカ||馬鈴薯||が主体）、油、塩味牛乳（自分の牛で自家製造）。仕事は一日八時間労働。おもしろいのは、昼食を知らせる十二時のサイレンが鳴ると、振り上げた槌も前におろさず後ろにおろすというぐあい、何をしていても我勝ちに作業をやる。物を蓄えることは全然しない。冬は仕事の帰りに松丸太を一本担いで帰り、ペチカの燃料（まき）をその晩の必要量だけつくる。翌晩も同じことを繰り返す。日本人なら日曜日などを利用して十分に積み込んでおくもので、私ができることを言うと、「フィニヤ（どうでもよい）」と言って、ジェスチャーたつぷりに笑っている。私たちはたばこに不自由したのでソ連人にねだると、自分が持っていれば全部出してくれる。彼ら自身も、ないときはだれかれの見境なくタバクナ

ーダとかダバイ（くれ）と言う。欲のないことにかけては抜群だ。

待ちに待った帰還の知らせから……

帰還の話は突然やってきた。昭和二十三年の夏、新潟出身の佐藤通訳が「増田は帰ることになった」と告げた。ラーゲルでは私一人だった。そして佐藤通訳と一緒に列車で別のラーゲルに連れていかれた。ところが何日たつても帰れそうな気配は全くない。逆に作業命令が出るではないか。だまされたのか、何かの手違いがあつたのか、不安に駆られていたところへ佐藤通訳と出くわした。話が違うことを訴えたら、早速当局と交渉してくれたらしく、間もなく数人がナホトカ行きの列車に乗せられた。

道中さしたるトラブルもなく、ナホトカで一泊して帰還船に乗船、舞鶴に着いた。そして白い作業服と弁当代を支給されて故郷へ向かった。駅には弟や子供たちが出迎えに来てくれていたが、弟に「あんたはだれかいのう」と尋ねてしまった。別れたときはまだ子供だったのがすっかり青年になっていて、一瞬わか

らなかつたのである。幼稚園から中学一年になつていた長男は、いきなり握手を求められてどきまぎしたことを今も覚えてゐるそうだ。ついつい抑留生活のときの癖が出てしまつたのだらう。

#### 帰国後の生活

やつと帰つてはきたものの、トラック二台を出資した貨物自動車の会社は終戦前に解散してしまつたといふではないか。ある程度予想はしていたものの、當てにしていたたちまちの働き口がない。伝手を求めて織維工場へ工員として雇われるが、遊んでゐる機械のさび落としをするだけの毎日に耐えられず、一月でやめてしまふ。友人と自動車の修理工場を始めたが、まだ敗戦の混乱期で、動いてゐる車の数もまだまだ少なうて仕事はほとんどなく、赤字が膨らむばかりで早々に解散を余儀なくされる。

地元の会社が運転手に雇おうとの話が進んだが、この話は二件ともが土壇場で壊れてしまつた。私がシベリア帰りというのが壊れた原因である。帰つてきてしばらくして町民集會が開かれた。集まつた人たちが壇

上で意見を述べるといふ、当時の風潮に沿つた集會だつた。浴衣姿で出かけた私は、シベリアから帰つてきたことを知つてもらうにはいい機会と思つて演壇に立つた。よく帰つてきたと客席のあちこちから拍手や歓声が上がリ、私もうれしくなつて壇上から、内容は忘れたが、大演説をぶつた。

これがよくなかつたらしい。就職が決まりかけていた二つの会社から、世話をしてくれた人を通して考え直させてほしいと言つてきた。このように社会復帰がなかなかままならず過ぎすうちにもインフレは進み、子供の成長などもあつて、我が家のたんすは空っぽになつてしまつた。